

はじめの一歩

テクニカル分析

ハンドブック4 (用語集)



NTAA[®]
The Nippon Technical Analysts Association

国際テクニカルアナリスト連盟 (IFTA) 加盟
日本テクニカルアナリスト協会[®]
特定非営利活動法人 (NPO 法人)

はじめに

本小冊子は、「はじめの一步 テクニカル分析 ハンドブック1・2・3」のまとめとして、金融市場やテクニカル分析でよく用いられる用語の解説をします。

相場の世界では、普段あまり使わない単語や独特の言い回しがあります。寄付きや大引けなど、一部の言葉は、遊郭で使われていた言葉に由来するといわれています。また、前場(ぜんば)、後場(ごば)、建玉(たてぎょく)など、独特の読み方をする言葉もあります。

このような用語はたくさんありますし、1つの言葉で複数の意味がある場合もありますが、その中から代表的なものを選んで紹介し、簡単な解説をつけました。

本書をご覧になることにより、金融市場やテクニカル分析でよく用いられる業界用語や技術用語の概略をご理解いただき、既出のハンドブックと合わせ、テクニカル分析とはどういうものかについて、興味を持っていただくきっかけになれば幸いです。私たち日本テクニカルアナリスト協会が推進している「テクニカル分析」は、皆さんの資産運用の一助になることを確信しています。

Introduction

目次

あ	あ	足 アノマリー アルゴリズム取引 α	あし …………… 4 あのまりー あるごりずむとりひき あるふあ …………… 5
	い	板 一目均衡表 移動平均線 陰陽足	いた いちもくきんこうひょう いどうへいきんせん …………… 6 いんようあし
	う	上影	うわかげ
	え	エリオット波動	えりおっとはどう …………… 7
	お	押目 オシレーター	おしめ おしれーたー
か	か	回帰 価格帯別累計出来高 鉤足	かいき …………… 8 かかたいべつるいけいできだか かぎあし
	き	逆指値 逆張り 金融工学	ぎゃくさしね …………… 9 ぎゃくばり きんゆうこうがく
	く	クォンツ	くおんつ …………… 10
	こ	行動ファイナンス 高頻度売買 効率的市場仮設 ゴールデนครロス	こうどうふあいなんす こうひんどばいばい こうりつてきしじょうかせつ … 11 ごーるでんくろす
さ	さ	サイクル 最適化 裁定取引 酒田五法 三角保合 三尊天井・逆三尊底 三段上げ/下げ	さいくる …………… 12 さいてきか さいていとりひき さかたごほう …………… 13 さんかくもちあい さんそんてんじょう・ぎゃくさんそんぞこ さんだんあげ/さげ …………… 14
	し	支持線 システム取引 下影 実体 順位相関係数 順張り 新値 新値足	しじせん しすてむとりひき したかげ …………… 15 じったい じゅんいそうかんけいすう じゅんばり …………… 16 しんね しんねあし
	す	スイングトレード スカルピング ストキャスティクス	すいんぐとれーど …………… 17 すかるぴんぐ すときゃすていくす
	そ	相関 相対力指数	そうかん …………… 18 そうたいりよくしすう

た	た	ダイバージェンス ダウ理論 騙し	だいばーじえんす…………… 19 だうりろん だまし
	ち	調整	ちょうせい…………… 20
	て	抵抗線 テクニカル分析 デッドクロス デリバティブ	ていこうせん てくにかるぶんせき でっどくろす…………… 21 でりばていぶ
	と	同事足 騰落レシオ ドテン (途転) トルー・レンジ (True Range、TR) トレンド トレンドライン ドロウダウン	どうじあし とうらくれしお…………… 22 どてん とるー・れんじ とれんど…………… 23 とれんどらいん どろーだうん
な	に	二番底	にばんぞこ…………… 24
	ね	ネックライン	ねっくらいん
は	は	売買高 バーチャート 半値戻し	ばいばいだか…………… 25 ばーちゃーと はんねもどし
	ひ	日柄	ひがら…………… 26
	ふ	ファンダメンタル分析 フィボナッチ数列 フォーメーション 吹値 節目	ふあんだめんたるぶんせき ふいほなっちすうれつ ふおーめーしょん…………… 27 ふきね ふしめ
	へ	β ヘッジ	べーた…………… 28 へっじ
	ほ	ポイント・アンド・フィギュア (Point and Figure、P&F) ポラティリティ ボリンジャーバンド	ぽんとあんどふいぎあ ぼらていりてい…………… 29 ぼりんじゃーばんど
ま	ま	マックディー (MACD) 窓	まっくでいー…………… 30 まど
	も	戻り高値 揉み合い モメンタム	もどりたかね もみあい…………… 31 もめんたむ
ら	り	リスク リトレースメント	りすく…………… 32 りとれーすめんと
	ろ	ロスカット ローソク足	ろすかっと ろーそくあし…………… 33

足(あし)

価格推移の足取記録のこと。日足(ひあし)、週足(しゅうあし)、月足(つきあし)などは、1本の足に記録された値動きの単位時間を表している。また、ローソク足、鉤足(かぎあし)、新値足などは、値動きの表現方法を表している。この他、「長い足」「短い足」などは単位時間における変動幅を意味しており、「上げ足」「下げ足」などはトレンドを意味している。さらに、表現方法や1本の足を指して「足形(あしがた)」という場合もある。

アノマリー

合理的な説明が難しい経験則のこと。例えば、週初めの月曜日には新たに買いポジションを持つ投資家が多いため価格が高くなりやすく、週末の金曜日にはポジションの整理が行われるため価格が安くなりやすい傾向がある。また、1年の中では年初の1月、年度初めの4月が高くなりやすいなど。また、月初の1日が日曜日で2日から取引が始まる月は相場が荒れやすいとして「2日新甫(しんぽ)は荒れる」などといったりする。

アルゴリズム取引(あるごりずむとりひき)

相場状況をコンピュータに判断させて、適切な条件が揃った時に発注する自動売買手法のこと。コンピュータ・プログラムの処理手順をアルゴリズムということに由来する。元々は、機関投資家が大口注文を執行する時などに、自らの発注によって相場が変動することが少ないように、他者の注文状況を勘案しながら自らの注文を小口に分けて発注する手法を指したが、現在はコンピュータを利用して発注する方法の総称として使うことが多い。

α (あるふぁ)

投資対象の収益率と市場全体の収益率の差のこと。投資対象固有の収益率であり、プラスであれば市場全体の収益率(β [ベータ]という)を上回っており、マイナスであれば下回っていることを意味する。市場を上回る投資収益を狙うことを「 α を取りに行く」といい、ファンダメンタル分析とテクニカル分析のどちらを用いるにせよアクティブ運用は α の獲得を目指している。アクティブ運用の反対語はパッシブ運用という。

板(いた)

個別の投資対象において、価格別に売り買いの注文状況を示した一覧表のこと。買いの注文株数が多ければ、その後の価格上昇が予想され、売りの注文株数が多ければ、その後の価格下落が予想されるが、実際にはその反対に動く場合も多い。以前は、売買注文を出す時に注目されたが、現在の証券取引所では1/1000秒単位で注文が執行される一方、液晶などの表示更新は1/60秒毎なので、正確な板状況を把握することは事実上不可能になった。

一目均衡表(いちもくきんこうひょう)

一目山人氏が昭和初期に考案した相場観測法。時間論、波動論、値幅観測論で構成され、節目となる価格変化が起こった日から基本数値や対等数値の日数を数えて将来の変化日を予測する。チャート分析では、実線(株価)、基準線、転換線、先行スパン1、先行スパン2、遅行スパンを用い、2本の先行スパンに囲まれた領域を雲と称して抵抗帯とする。海外でも英文の解説書が出版されるなど、認知が広がりつつある。

移動平均線(いどうへいきんせん)

過去一定期間の価格を平均して連続させた線のこと。価格は、種々雑多な材料を織り込んで細かく上下するが、これはいわば雑音のようなもので、価格推移の傾向を隠して分かりにくくしている。そこで、価格を平均することによって細かい上下動を取り除き、本質的な傾向を明確にしようとしたもの。単純移動平均は、計算は簡単だが実際の価格推移からの遅行が大きい。遅行性を改善したものに指数平滑移動平均、加重移動平均などがある。

陰陽足(いんようあし)

陰線と陽線の区別があるチャートのこと。現在はローソク足のこと。終値が始値よりも安い足を陰線、終値が始値よりも高い足を陽線というが、昔は両者の区別があるものはすべて陰陽足と呼んだ。江戸から明治にかけての時代には、相場の陰陽は、陰陽五行(十干と同じ甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸)が関係していると考えられており、陰陽五行の暦と合わせて相場の予測が行われるなど、陰陽は特別の意味を持っていた。

上影(うわかげ)

ローソク足において、実体の上端(始値と終値のいずれか高い方)から高値まで引かれる縦線のこと。上影は、買い方が高値まで買い上がったものの、最終的には売り方に押し戻されたことを意味するので、売り方優勢と判断されることが多い。しかし、実際には、上陰線(うわかげせん=下影よりも上影の方が明確に長い線)は上昇局面において多く観察されることから、買い方が敵陣へ攻め込んだ痕跡という見方ができるかもしれない。

エリオット波動(えりおっとはどう)

R. N. エリオットが1938年に出版した「波動原理」で提唱した広範な相場観測法。価格推移は上昇・下落・上昇・下落・上昇の5波動で上昇し、下降・上昇・下降の3波動で下降する8波動で構成される。この中の上昇と下落はより小さい8波動で構成される一方、全体はより大きなサイクルの上昇と下降の2波に相当し、価格推移はフラクタル構造になっているとする考え方。現在でも一部に根強い支持者がいる。

押し目(おしめ)

価格推移が上昇基調にある中で一時的に価格が下落する場面のこと。「悪目」と書く場合もある。下落しても直ぐに反発して元の上昇基調に戻るので買いの好機とされ、この場面で買うことを「押し目買い」という。しかし、押し目を作らずに上昇することもあり、好機を待つて投資機会を逸してしまうことを「押し待ちに押し目なし」と冷やかしていう。さらに、下降に転じた初期場面が押し目に見える場合もあり、十分な注意が必要である。

オシレーター

ある水準を基準として上下動を繰り返す性質のあるテクニカル指標のこと。基準値に戻る性質があることから、基準値から大きく外れた場合には、いずれ基準値に戻ることが想定される。そこで、そのような場合には、価格推移が反転することを前提として、ポジションを持つ準備をする。現在の価格推移とは反対方向の投資を狙うことから「逆張り指標」ともいわれる。1950年代以降、コンピュータの普及と共に欧米で開発が進んだ。

回帰(かいき)

特定の値もしくは位置に戻る。例えば価格は移動平均から上に放れては戻り、移動平均を乗り越えて下に放れては戻るといった動きを繰り返しており、常に移動平均に戻ろうとする。このように、ある値に戻ることを回帰するといい、このような性質があることを回帰性があるという。回帰性があると、回帰する値から大きく乖離すると反転が予想されるので投資に利用できる。この性質を利用して行う分析手法を回帰分析という。

価格帯別累積出来高(かかきたいべつるいせきできだか)

一定期間における売買高を価格帯別に集計して表示したチャートのこと。揉み合い相場や価格推移が転換する前後では売買高が多くなる傾向があり、未決済玉が蓄積されている可能性がある。そして、その価格帯を通過する時に未決済玉の解消が行われると、相応の期間、揉み合う展開に入ることが予想される。そこで、価格帯別に売買高を集計して、どの価格帯に売買高が集中していたかを知り、支持帯や抵抗帯として注目する。

鉤足(かぎあし)

江戸時代に考案されたチャートの1つ。価格が、それまでと同じ方向に一定の値幅動いたら縦線を伸ばし、逆方向に動いたら横線を引いて行を変え縦線を引く。決めた値幅未満の動きは無視する。比率や新値更新をルールにすることもある。横軸が時間軸で時間順に記録されるが、等間隔ではないので不規則時系列チャートに分類される。現在も、柴田罫線、田丸チャートとして利用者はいるが、あまり多くはない。

逆指値(ぎゃくさしね)

指定価格を上回ったら買う、指定価格を下回ったら売る注文のこと。普通の指値注文は、指定価格以下で買う、指定価格以上で売る注文だが、逆指値注文はその反対を行う。価格が判断基準を上回って上昇局面入りが確認できたら買う、基準を下回って下降局面入りが確認できたら空売りをする、あるいは思惑と反対方向に一定以上動いたら損失が拡大する前に手仕舞ってロスカットするといった注文を出したいときに用いる。

逆張り(ぎゃくばり)

価格推移が反転することを前提としたポジションを持つこと。反転しなければ利益が出ないので、現在の価格推移が続けば損失が膨らみ、リスクと心理的ストレスの大きい投資手法である。価格が天井をつける場面では、反落に転じてからでは投売りが殺到して売りポジションを作るのが難しいので、ヘッジファンドなど投機的な大口投資家が上昇している間に先回りして売りポジションを作ることがある。個人投資家向けの手法ではない。

金融工学(きんゆうこうがく)

金融機関が、資産運用やリスク管理などを合理的に行うための実践的方法論の総称。適切な投資戦略を企画立案するためには、リスクを考慮した投資収益率の計測、資産規模に応じたリスクの制御、適切な投資配分の管理などを合理的かつ定量的に行う必要がある。そこで、数学、統計学、計量経済学、物理学などを組み合わせて様々な管理方法が考案され、度重なるクラッシュを経験することで、より実用的に精緻化されている。

クオンツ

数学、統計学、計量経済学、物理学などを用いて、運用モデルを構築したりリスクの制御を行う金融専門家のこと。計量アナリストを意味する「Quantitative Analysts」の略。1970年代、アポロ計画の終了によりNASA(米航空宇宙局)が人員削減を行った際に、大量の科学者がウォール街に再就職し、新しい発想で相場に対峙したのが発端といわれる。このため、古くはロケット・サイエンティストと呼ばれた。

行動ファイナンス(こうどうふぁいなんす)

経済的な損得が絡んだ時の人間の心理変化や判断の行われ方を、学生実験などによって実際の人間行動を観察して定量的に研究する学問のこと。「Behavioral Finance」の訳語で、直訳すれば行動金融学だが、経済学というよりは心理学に近い。1990年代から発達し、利害が絡むと、人間が必ずしも合理的な判断や行動を取らないこと、人間が相場で損失を出しやすい心理傾向を持っていることなどが明らかになった。投資家の必修科目といえる。

高頻度売買(こうひんどばいばい、High Frequency Trade)

コンピュータを利用して極めて短い時間軸で継続的に行う自動売買手法のこと。証券取引所に発注された注文状況や価格変化を1/1000秒単位で監視し、コンピュータが条件判断をして、その時に有利な注文を発注すると同時に、過去の不利となった注文を取り消すことで利益を得ようとする仕組み。約定しないで取り消される注文が大量に増えたので、架空注文によって相場状況を誤認させる「見せ玉」に類似しているという批判もある。

効率的市場仮説(こうりつてきしじょうかせつ)

多数の投資家が参加する市場は効率的であり、価格インパクトのある情報も合理的かつ瞬時に価格に反映されるので、市場平均を上回る収益を得ることはできないとする学説。1990年前後に支持され、パッシブ運用の根拠とされた。しかし、すべての投資家が適切な投資判断を下すのであれば、売買はいずれか一方に偏るはずで取引は成り立たない。行動ファイナンスからも否定する結果が得られており、現在では支持者は少ない。

ゴールデンクロス(GC)

計算期間の短いテクニカル指標が、計算期間の長い同一指標を下から上へ突き抜けて、相場の上昇入りが示唆されること。英国の金融コンサルタント、ブライアン・マーバーが提唱したという。元々は、株式において75日移動平均線が200日移動平均線を下から上へ突き抜けることを意味したが、現在では日数の組み合わせに関係なく、また移動平均線以外でも使われる。クロス後、トレンドがいつも長期間続くなら、収益が得られるのだが。



サイクル

価格推移において、節目となる安値から次の安値までのこと。期間が数週間以下のものを短期、数ヵ月程度を中期、数年以上を長期サイクルという。価格推移は、投資家の心理や投資家を取り巻く様々なルール、季節変化などによって、しばしば周期的に上下動を繰り返すが、この周期性について分析する手法をサイクル分析という。現在ではフーリエ解析やスペクトル分析など、物理学を応用して高度な分析が行われることもある。

最適化(さいてきか)

テクニカル指標の計算期間などを調節して、分析対象の収益を最大化すると同時にリスクの最小化を図ること。価格推移のサイクルやボラティリティなどの変動特性は、投資対象によって異なっているので、テクニカル指標は分析対象に合わせてシグナルの出方を調節する必要がある。分析対象の過去データを用いて調節するが、過去の推移に最適化させすぎると、将来の推移に適合しない可能性が大きくなる点には注意が必要である。

裁定取引(さいていとりひき)

先物と現物が取引最終日には同値になることを利用して、両者の価格差が理論値よりも縮小したり拡大した時に、割高のものを売り、割安のものを買って乖離分を獲得する取引方法のこと。裁定ポジションを作った時点で利益が確定するのでリスクは小さいが、取引コストを上回る乖離が生じることは少なく、投資機会は多くない。大きな資金量が必要な割に利益率が小さい場合が多く、主に機関投資家が行う手法である。

酒田五法(さかたごほう)

出羽庄内(現在の山形県酒田市)の本間宗久が考案したとされる相場観測法。本間宗久は、米相場で大財を成した江戸時代の米商で、その相場心得が本間翁の著書として明治時代に出版されているが、そこには罫線の解説はない。従って、本間翁の名を借りた後世の作と考えられるが、作者は不詳である。三山、三川、三法などで構成され、ローソク足の古典的な解釈法として広く知られているほか、一部は海外にも紹介されている。

三角保合(さんかくもちあい)

価格推移が上昇と下落が繰り返される保合相場のうち、高値同士を結んだ線と安値同士を結んだ線の間隔が、徐々に狭まって三角形となる展開のこと。三角形の右端で上下どちらかに放れるが、その場合、短期間で大きく動く場合が多い。高値が徐々に切り下がる場合は売り方優勢、安値が徐々に切り上がる場合は買い方優勢が暗示される。海外では数ヵ月に及ぶものをトライアングル、数週間で終わるものをペナントと呼んで区別する。

三尊天井・逆三尊底(さんぞんてんじょう・ぎゃくさんぞんぞこ)

大勢転換する時に現れるとされる価格推移のパターンで、3つの高値のうち中央が最も高く、左右が同程度の高さとなる場合を三尊天井、3つの底値のうち中央が最も深く、左右が同程度の深さとなるものを逆三尊底という。海外でもヘッド・アンド・ショルダーズ・トップ／ボトム(H&ST / H&SB)と呼んで注目される。ただし、日本では三尊天井が肩、腰、肩、腰、肩で構成されるのに対し、海外のものは期間、形状共にかなり寛容である。

三段上げ / 下げ(さんだんあげ / さげ)

上昇または下降の局面で2回の反動場面があること。日本では古くから、上昇局面では上・下・上・下・上の三段で上げ、下降局面では下・上・下・上・下の三段で下げると考えられていた。両者を合わせて三段高下(さんだんこうげ)という。これによって、相場推移の中で、現在の相場がどこまで進展したかを判断しようとした。エリオットの5波動と全く同じ捉え方だが、エリオットが三段高下から着想を得たとは考えにくい。

支持線(しじせん)

上昇局面の起点となる底と、その後の上昇過程で現れた節目となる安値を結んで右方へ延長した線のこと。あるいは、過去に大勢が転換した天井や底を起点として、右方へ引いた水平線のこと。前者は下値支持線ともいう。上昇していた価格が下落に転じた場合、単なる押し目なのか、あるいは下落に転じたのか判断し、投資行動の決断をしなければならないが、その目安として、これらの線と交差する水準に注目する。

システム取引(しすてむとりひき)

コンピュータが条件判断をして自動的に売買すること。コンピュータのプログラムにファンダメンタル分析やテクニカル分析の様々な判断基準を組み込み、価格推移と照らし合わせることで売り買いを判断し、人手を介さずに建玉と手仕舞いを行う取引手法のこと。アルゴリズム取引はシステム取引の一種だが、発注によって市場の価格形成が歪められないことに重点が置かれており、収益の獲得が目的ではない点が異なる。

下影(したかげ)

ローソク足において、実体の下端(始値と終値のいずれか安い方)から安値まで引かれる縦線のこと。下影は、売り方が安値まで売り浴びせたものの、最終的には買い方に押し戻されたことを意味するので、買い方優勢と判断されることが多い。しかし、実際には、下陰線(したかげせん=上影よりも下影の方が明確に長い線)は下降局面において多く観察されることから、売り方が敵陣へ攻め込んだ痕跡という見方ができるかもしれない。

実体(じったい)

ローソク足において、始値と終値の間に描かれる太い軸の部分のこと。ローソク足が考案された明治時代には、始値から終値までが本来の値動きであり、そこから逸脱して高値や安値をつける動きは虚象と考えられていた。虚象は一般的に「影」と呼ばれたが、始値から終値までの部分に対する一般的な呼称はなかった。「要軸」などと呼ばれることはあったが、いつから「実体」と呼ばれるようになったのかは定かではない。

順位相関係数(じゅんいそうかんけいすう)

スピアマンが考案した時間経過と価格推移の相関を示す係数のこと。最新を1とした一定期間の時間の順位と価格の順位の間関係数で、 ± 100 の値をとる。 $+70$ 以上であれば時間の経過と共に価格が上昇する傾向が強く、 -70 以下であれば下落する傾向が強いことを意味する。計算期間を長めとする方が騙しが少なくなり、短期投資よりは中長期投資向きの指標である。ただ、式が煩雑で計算しにくいことが難点である。

順張り(じゅんばり)

現在の価格推移が続くことで利益が得られる方向に投資を行うこと。上昇局面では買い、下降局面では売りのポジションを取ることを意味し、初心者にも向く売買手法である。海外でも「The Trend is Your Friend」といって推奨している。ただし、買った後もトレンドが長く続くという保証はないので、マーケットに参加するつもりなら、トレンドの発生を確認したら直ぐに行動を起こせるように準備しておいた方が良い。

新値(しんね)

過去一定期間における最高値もしくは最安値のこと。前者は新高値、後者は新安値といい、上場来高値、年初来高値など、いつからの記録かが分かるように明示して使う。過去の記録となる価格は、支持帯や抵抗帯として強く意識されるので、それを更新するには相応のエネルギーが必要となる。新値の更新は、相場に力があることを暗示しており、その方向の価格推移が続いたり加速する可能性があるので特に注目される。

新値足(しんねあし)

過去一定期間の新値を更新したらチャートに記録する描画方法のこと。最も一般的な3本新値足(新値3本足ともいう)は、直前3本の足の最高値または最安値を更新する度に行を変えて記録する。明治時代に井上陽三郎が紹介したのが最初で、直前1本の新値を更新する度に記録した。この他に、価格推移が反転するまで行を変えずに鉤足で描く、陰陽切替足があり、本間宗久が使用したとされるが、現在使われることはまれである。

スイングトレード

数日～数週間の価格変動を検出して順張りを行う投資戦略のこと。価格が移動平均線を上回ったら買い、下回ったら売る、オシレーターが価格上昇入りを示唆したら買い、下落入りを示唆したら売るといった、価格推移の方向転換に注目して、転換した方向にポジションを取る。流動性が高く方向観がつかみやすい投資対象に有効だが、騙しのシグナルも多いので、ファンダメンタルズにも配慮した相場観を養うことが肝要である。

スカルピング

小掬い(こすくい)商いのこと。現在は、ディーラーやデイトレーダーなどが、日中の小さな値動きを捉えて小幅な利益確定を繰り返す投資手法を指す場合が多い。元々は、ブローカーなどが特定銘柄を顧客に推奨し、価格が動いた所を狙って、自ら事前に仕込んでおいたポジションを解消することで利益を得る違法行為を指したが、こちらは顧客の先回りをすることから日本ではフロント・ランニングと呼んでいる。

ストキャスティクス

1957年に米国のジョージ・レーンが発表したオシレーター。一定期間における最高値と最安値の間で、直近の終値が下から何%の位置にあるかを計算。100%(=最高値)に近ければ買われ過ぎ、0%(=最安値)に近ければ売られ過ぎと判断する。%K、%D、slow%Dの3種類があるが、現在は%Dとslow%Dを使うことが多い。人気のある手法だが、価格が継続的に上昇または下降している場合には「騙し」が多くなるので注意が必要である。

相関(そうかん)

2つの数列の連動関係のこと。例えば株価、為替、金利などは、相互にある時は連動し、ある時は逆行することが知られているが、この関係の強弱は数学的に求めることができる。この数値を相関係数(そうかんけいすう)という。相関係数は ± 1 の数字で表され、 $+0.7$ 以上であれば正の相関(=連動性)が強く、 -0.7 以下であれば負の相関(=逆行性)が強いと判断される。しばしば投資対象の特性を明らかにする目的で利用される。

相対力指数(そうたいりょくしすう)

1978年に米国のJ. ウェルズ・ワイルダー Jr.が発表したオシレーター。一定期間における終値の前日比騰落幅の累計の中で、前日比で上昇した値幅の合計が何%かを計算。100%(=連続高)に近ければ買われ過ぎ、0%(=連続安)に近ければ売られ過ぎと判断する。名前はRelative Strength Indexの直訳だが意味は不明。人気のある手法だが、価格が継続的に上昇または下降している場合には「騙し」が多くなるので注意が必要である。



ダイバージェンス

テクニカル指標の推移と価格の推移が逆行すること。価格が高値を更新しているにもかかわらず、指標が下落傾向となることをネガティブ・ダイバージェンスと呼んで反落の予兆とされ、逆に、価格が安値を更新しているにもかかわらず、指標が上昇傾向となることをポジティブ・ダイバージェンスまたはコンバージェンスと呼んで反騰の予兆とされている。価格が方向転換する前に現れることが多いが、出現したら必ず反転するとは限らない。

ダウ理論(だうりろん)

1890年頃、米国のチャールズ・ダウが、自身が創刊したウォールストリート・ジャーナル誌の中で発表した相場観測法のこと。市場全体を映す鏡としてダウ式平均株価を考案し、株価はすべての情報を織り込むこと、価格推移は波の動き似ていること、相場の栄枯盛衰には3段階があること、工業株と運輸株には連動性があることなど、市場の変化には特徴があることを示した。死後に後継者たちが発言をまとめて「ダウ理論」と呼んだ。

騙し(だまし)

テクニカル指標が売買シグナルを発信したものの、その後、想定と異なる相場展開となること。価格推移が長期に亘って下落した後、しばらく見ないほどの値幅で上昇し、反発が期待されたにもかかわらず再び下落に転じたり、長期間上昇が続いた後、大きく下落して反落が示唆されたにもかかわらず再び上昇に転じるような場合に「騙し」のシグナルが発信されることが多い。一般的にオシレーターの方が「騙し」が多い傾向がある。

調整(ちょうせい)

株価などの価格が下落すること。証券業界では、株価が下がることを嫌って「下がる」と言わずに「調整する」という。短期間で株価が大幅に上げた時には、上昇ペースが速過ぎると投資家がついて来られないので、途中で株価が一休みして投資家が追いつくのを待つためのスピード調整が必要とされるが、上昇局面で現れた小幅な下落は、単なるスピード調整であって天井をつけて下落に転じたのではないという期待がこめられている。

抵抗線(ていこうせん)

下降局面の起点となる天井と、その後の下落過程で現れた節目となる高値を結んで右方へ延長した線のこと。あるいは、過去に大勢が転換した天井や底を起点として、右方へ引いた水平線のこと。前者は上値抵抗線ともいう。下降していた価格が上昇に転じた場合、単なる吹き値なのか、あるいは上昇に転じたのか判断し、投資行動の決断をしなければならないが、その目安として、これらの線と交差する水準に注目する。

テクニカル分析(てくにかるぶんせき)

過去の価格や売買高などの推移から、将来の価格推移を予想する分析手法のこと。価格変動の原因や、因果関係などの追求は行わない。価格は需要と供給の力関係で決まるという考えに基づいているが、実際には、上昇するから買われ、下落するから売られるという側面もある。最近、価格推移は時間相関するので統計学的に有効とする説が出た。一般に、売買のタイミングを計るのに向いており、投資対象の選択には向かないとされている。

デッドクロス

計算期間の短いテクニカル指標が、計算期間の長い同一指標を上から下へ突き抜けて、相場の下落入りが示唆されること。当協会元会長の吉見俊彦の造語といわれ、海外ではデスクロスという。元々は、株価の75日移動平均線が200日移動平均線を上から下へ突き抜けることだが、現在では日数の組み合わせに関係なく、また移動平均線以外でも使われる。これを売り信号とする場合は、実際の価格推移よりも大幅に遅行している点に注意。

デリバティブ

先物やオプションなど、現物から派生した金融商品のこと。一般的な商取引では、約定すると商品と現金が交換されるが、先物取引は将来の指定期日に商品を渡すことを約束する取引、オプション取引は将来の指定期日に指定金額で商品を売買する権利を渡すことを約束する取引で、期日までに反対売買を行えば商品の移動を伴わないこともある。資金効率や収益率、リスクなどをコントロールする目的で取引されることが多い。

同事足(どうじあし)

ローソク足において、寄引(よりひけ=始値と終値のこと)が同値となり、十字型になる足のこと。寄引から安値までの下影よりも、寄引から高値までの上影の方が長いものを上同事(うえどうじ)、下影が長いものを下同事(したどうじ)といい、始値、高値、安値、終値すべてが同値となって横棒となる場合を4本同事(よんほんどうじ)という。売りと買いが拮抗していることを示唆し、転換点に現れやすいとされている。

騰落レシオ(とうらくれしお)

市場全体の動きを知るための指標の1つ。上昇銘柄数を下落銘柄数で割ったもので、通常は%で表す。100を大きく超えていれば、上昇銘柄数の方が下落銘柄数よりも多く、市場全体が強気に傾いており、100を大きく下回っていれば、下落銘柄数の方が上昇銘柄数よりも多く、市場全体が弱気に傾いていると判断します。ただ、売買高や騰落幅などを考慮していないので、大雑把な方向感を示す指標と考えた方が良いでしょう。

ドテン(途転)

保有しているポジションを正反対にすること。買建玉をすべて売却した上で、さらに新規に売り建てたり、売建玉をすべて買い戻した上で、さらに新規に買い建てることを指す。売り手仕舞いのシグナルが同時に新規買い建てのシグナルとなり、買い手仕舞いのシグナルが同時に新規売り建てのシグナルとなるタイプの指標を使っている場合や、相場が思惑と反対方向に動いたためにポジションを修正する場合などに行われる。

トルー・レンジ(True Range, TR)

1978年に米国のJ. ウェルズ・ワイルダー Jr.が発表した指標。①当日の高値と安値の差、②前日終値と当日高値の差、③前日終値と当日安値の差、のうちの最大値で、前日から当日にかけての価格変動の大きさを表している。TRは、ボラティリティの概念がなかった時代に考案された代理指標と見ることができ、この変化を注意深く観察することで、トレンドの継続や転換、加速や減速を知ることができるとして、米国では非常に重視されている指標である。

トレンド

価格推移の傾向あるいは方向性のこと。価格が直線的な方向性をもって動く場面を指して「トレンドがある」という。トレンドには上昇トレンド、下降トレンド、横ばいトレンドの3種類があり、長さによって短期(数週間以下)、中期(数カ月程度)、長期(数年程度)の3種類がある。このほか、主要トレンド、修正トレンドなど、トレンドの性格によって様々な種類に分類されている。

トレンドライン

トレンドの方向を明確にするためにチャートに付加する補助線のこと。上昇トレンドにおいて節目となる安値同士を結んで引かれる下値支持線、下降トレンドにおいて節目となる高値同士を結んで引かれる上値抵抗線、あるいはそれらと平行に引かれるチャネルラインは代表的なトレンドラインである。この他、移動平均線も価格推移の動きの趨勢を示していることから、トレンドラインの一種と考えることができる。

ドローダウン

運用モデルにおいて運用期間中に発生が想定される損失のこと。様々な指標と売買ルールを組み合わせる運用モデルを構築する際、発生頻度は低くても大きな損失が発生すると、リスク管理上ポジションの整理が必要となり、モデルに対する信頼性も揺らぐなどして運用を続けられなくなる可能性が高い。そこで、ドローダウンを小さくしつつ、十分な収益を上げられるような運用モデルを構築することが肝要となる。

二番底(にばんそこ)

大勢下落から上昇に転じる際、大底(一番底)をつけて反騰となった後、再び下落して形成される大底よりも浅い安値のこと。二番底が形成された後、直前の高値を上回った時点で底打ちと判断される。新しい安値が大底を下回る場合は、新しい安値が新たな大底となる。ただし、大きな支援材料があつて反騰に転じた場合などでは、明確な二番底を作らずに上昇へ転じることもあるので、二番底は反転確認の必須条件ではない。

ネックライン

ヘッド・アンド・ショルダーズ・トップ／ボトム(H&ST／H&SB)において、トップとショルダーの間の2つの谷、もしくはボトムとショルダーの間の2つの頂を結んで引かれる線のこと。ネックラインを跨いだ時点でフォーメーションは完成され、その後の反動がネックライン近傍に達することもあるので、それらの目安とされる。必ずしも水平であるとは限らず、日本の三尊天井／逆三尊底で引かれることもある。



売買高(ばいばいだか)

取引が成立した数量のことで、買い数量と売り数量の合計。株式であれば株数、先物であれば枚数。売り買い片方の場合を出来高(できだか)という。海外では、下降トレンドでは下降局面で売買高が増えるとされ、供給圧力を表していると考えられている。しかし、日本では上昇局面など先高期待がある場合だけ売買高が増え、下降局面では減少することが多い。従って、日本では売買高は需要圧力を表していると考えられる。

バーチャート

欧米で用いられるチャートのこと。1日の高値と安値を結んで縦線を引き、始値は縦線の左側に短い横線で表し、終値は縦線の右側に短い横線で表す。1900年代前半に考案された価格記録方法で、始値を省略することもある。欧米で投資の基礎となっているダウ理論が、終値を最も重要としているためかもしれない。しかし、バーチャートでは当日の騰落が分かりにくいので、世界的にローソク足が使われることが多くなっている。

半値戻し(はんねもどし)

大きな下落があった後、下げ幅の半分程度反発すること。「戻し」は反発を意味する。戻し幅によって1/3戻し、2/3戻しなどということもある。反対に大きな上昇の後、上昇幅の半分ほど下落することを「半値押し」という。「押し」は下落を意味する。1/3押し、2/3押しなどということもある。反動の比率として1/2、1/3、2/3が統計的に多いというわけではないが、その程度逆行すると達成感が生じるので目安とされることが多い。

日柄(ひがら)

経過日数のこと。急激な、あるいは大幅な上昇や下落が起こった後、平常の相場推移に戻る前に、相応の価格幅の反動があると同時に、相応の期間、揉み合う展開となることが多い。これを「日柄調整(ひがらちょうせい)」という。一説には、価格の反転で処分し損ねた建玉が、反対売買によって解消されるのに日数が掛かるからだといわれる。ただ、揉み合いが続く理由が分からないので、「日柄調整」と称して済ませていることもある。

ファンダメンタル分析(ふぁんだめんたるぶんせき)

価格変動要因や因果関係を追求して、そこから将来の価格推移を予想する分析方法のこと。直近の価格推移や需給関係の変化は考慮しない。例えば、株価は企業業績に連動することが多いので、企業業績の動向を正確に予測できれば将来価格の予想ができる。しかし、実際には企業業績の行く末を正しく予想することは不可能に近い。一般に、投資対象の選択に向いており、売買タイミングの判断には向いていないと考えられている。

フィボナッチ数列(ふいぼなっちすうれつ)

イタリアのフィボナッチが発見した、最初の2数が0と1で、3番目以降は直前の2数の和となる数列のこと。0,1,1,2,3,5,8,13,21,34 …となるが、1つ前の数を現在の数で割った値は常に0.61818 …となり、これを黄金比という。また、2つ前の数を現在の数で割った値は、常に0.38181 …となり、1-黄金比となる。自然界の比率に良く見られるとされ、価格推移における騰落日数の比やリトレースメントの目処として、海外で良く用いられる。

フォーメーション

価格推移の類型様式のこと。パターンともいう。日本では、古くは「形式」といわれたが、現在は英語を使うことが多い。フォーメーションには、その前後で騰落の方向が反転する「リバーサル」と、方向が継続する「コンティニューエーション」がある。ヘッド・アンド・ショルダーズなどは前者、三角保合などは後者とされるが例外もある。発生から終息までに要する期間は、前者は数ヶ月程度、後者は数週間程度のことが多い。

吹値(ふきね)

価格推移が揉み合いまたは下降基調にある中で一時的に価格が急騰する場面のこと。噴値とも書く。この場面で売ることを「吹値売り」という。上昇基調であれば、天井に接近するまで待つて売るのが基本だが、上昇を期待して買ったものの思惑に反して揉み合う展開となり一向に上がる気配が見えないとなると、小さな吹値で手仕舞うことになる。苦勞して手仕舞った途端、本格的な上昇が始まるなどということもあるので厄介である。

節目(ふしめ)

長期トレンドの途中で価格推移の反転によって生じる小さな山や谷のこと。節目は、結果的にトレンドの起点や終点となる大底や大天井となる場合もある。節目が直前の節目を継続的に上回っていれば上昇基調の確認指標となり、反対に継続的に下回っていれば下降基調の確認指標となる。また、継続的に上回っていたものが下回る、あるいは継続的に下回っていたものが上回るなどすれば、基調転換の予兆にもなる。

β (ベータ)

市場全体の投資収益率のこと。例えば株式であれば日経平均や東証1部総合株価指数(TOPIX)の投資収益率のことで、インデックス・ファンドで得られる投資収益率は β と一致する。アクティブ運用の投資収益率(α [あるふぁ]という)を計るベンチマークとして用いられ、 β を上回れば運用が優れていることを、下回っていれば劣っていることを示唆する。テクニカル分析やファンダメンタルズ分析は、 β を上回ることを目指している。

ヘッジ

リスクを回避するためのポジションのこと。例えば、株価指数先物を買って建てた場合には、万が一の下落に備えて、少額で投資が可能で下落すると利益が出るプット・オプションを購入するなどが行われる。ヘッジ・ファンドは、本来は、複数の金融商品を組み合わせることで、リスクを限定して投資収益を得ることを狙ったファンドのことで、レバレッジを効かせたハイリスク・ハイリターン・ファンドのことではない。

ポイント・アンド・フィギュア(Point and Figure、P&F)

1933年にビクトール・ド・ビリエが発表したチャートのこと。1940年代にA. W. コーエンが下降局面を○、上昇局面を×で表す現在の形にした。価格が一定値幅動いたら○または×印をつけ、その3倍分逆行したら行を変えて反転させ、それ以外の値動きは記録しない。日本の鉤足に発想が近い。大きな相場観測論で、使うのに慣れが必要なので日本ではあまり人気がないが、海外では現在も人気の高いチャートである。

ボラティリティ

価格推移の変動しやすさのこと。相場が乱高下して変動率の大きい状態が続くことを「ボラティリティが大きい」「ボラタイルである」といい、膠着して変動率の小さい状態が続くことを「ボラティリティが小さい」「ボラタイルでない」という。一般にボラティリティが大きいとリスクも大きく、ボラティリティが小さいと収益機会も小さいことが多い。従って、ボラティリティが小さい方が、投資対象として望ましいとは限らない。

ボリンジャーバンド

米国のジョン・ボリンジャーが1990年頃に発表したチャートのこと。過去一定期間の価格の標準偏差(σ ・しぐま)を計算し、移動平均線に 1σ 、 2σ を加減したラインを引き、騰落の価格目処とする。揉み合い局面では $\pm 2\sigma$ の間で往来するので $\pm 2\sigma$ は逆張り目処に、強いトレンドが発生すると片側の 2σ ラインを押し広げるように推移するので $\pm 2\sigma$ は順張り目処となる。場面によって順張り、逆張りの使い方が変わるので注意が必要である。



マックディー (MACD)

米国のジェラルド・アペルが1985年に発表した、価格変化を示すオシレーター。Moving Average Convergence-Divergence (移動平均収束発散法)の略。MACDは長短2本の指数平滑移動平均値の差、シグナルはMACDの指数平滑移動平均値、ヒストグラムはMACDとシグナルの差。これらの組み合わせにより、価格推移の加速や鈍化、方向転換を検知する。プロ、アマチュアを問わず、内外に利用者が多い指標である。

窓(まど)

前日と当日の足形の間が生じた隙間のこと。隙間ができることを「窓を空ける」という。前日より当日の方が高い場合は、前日の高値よりも当日の安値の方が明確に高い時、前日より当日の方が安い場合は、前日の安値よりも当日の高値の方が明確に安い時に窓が空く。大きな材料が出るなどして、市場参加者の相場観が騰落の片方に偏ったときに起こる。小型株では発生頻度が高く、大型株や株価指数では発生しにくい。

戻り高値(もどりたかね)

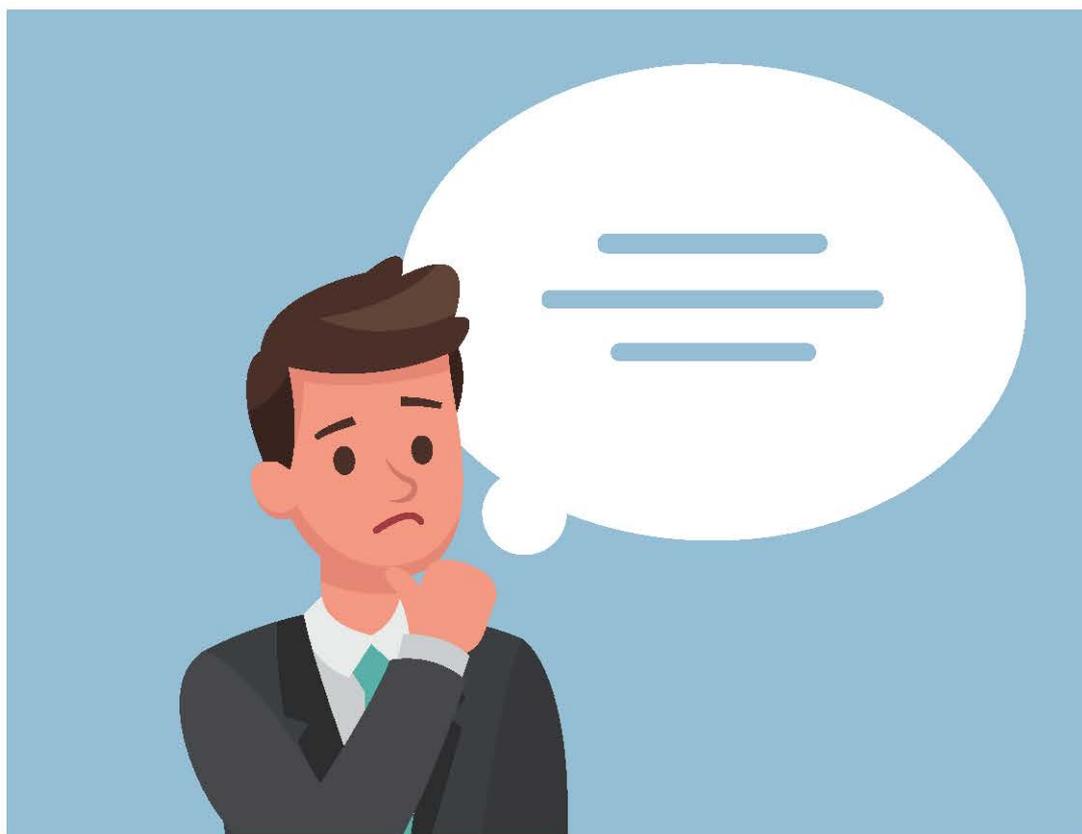
大勢上昇から下落に転じる際、大天井をつけて反落となった後、再び上昇して形成される大天井よりも低い高値のこと。戻り高値が形成された後、直前の安値を下回った時点で反落入りと判断される。新しい高値が大天井を上回る場合は、新しい高値が新たな大天井となる。ただし、大きな悪材料があつて反落に転じた場合などでは、明確な戻り高値を作らずに下落へ転じることもあるので、戻り高値は反転確認の必須条件ではない。

揉み合い(もみあい)

価格が小幅で上下動を繰り返す、横這い相場のこと。買い方と売り方の勢力が拮抗している時に現れるとされ、上昇局面や下降局面の中休み場面、天井局面、底値局面など、どこでも出現する。揉み合いの前後で価格推移の方向が反転することもあるが、変わらないこともあり、揉み合いを放れた後は動きが加速することがある。海外では、数カ月に及ぶものをレクタングル(長方形)、数週間で終わるものをフラッグと呼んで区別する。

モメンタム

値が変化する勢いのこと。通常は、一定期間過去の値と当日の値を比較した差、あるいはその累積である。ロジックが単純なため、一番最初に考案されたテクニカル分析ではないかと推測される。モメンタムは、オシレーターと異なり、特定の値に戻るといった性質を持たないので、発散してしまうこともある。厳密にはオシレーターとモメンタムは異なるカテゴリーだが、モメンタムという名のオシレーターが存在するのは厄介だ。



リスク

価格が変動する大きさのこと。運用途中で生じる損失規模の可能性を事前に知り、適正な水準に管理することは重要である。リスクにはダウンサイド(下落)・リスクとアップサイド(上昇)・リスクがあるが、片方だけを測定する方法はないので、両方を包含した価格変化率の標準偏差で代用することが多い。この値をVaR (Value at Risk、バリュー・アット・リスク)という。また、リスクの管理をすることをリスク・マネジメントという。

リトレースメント

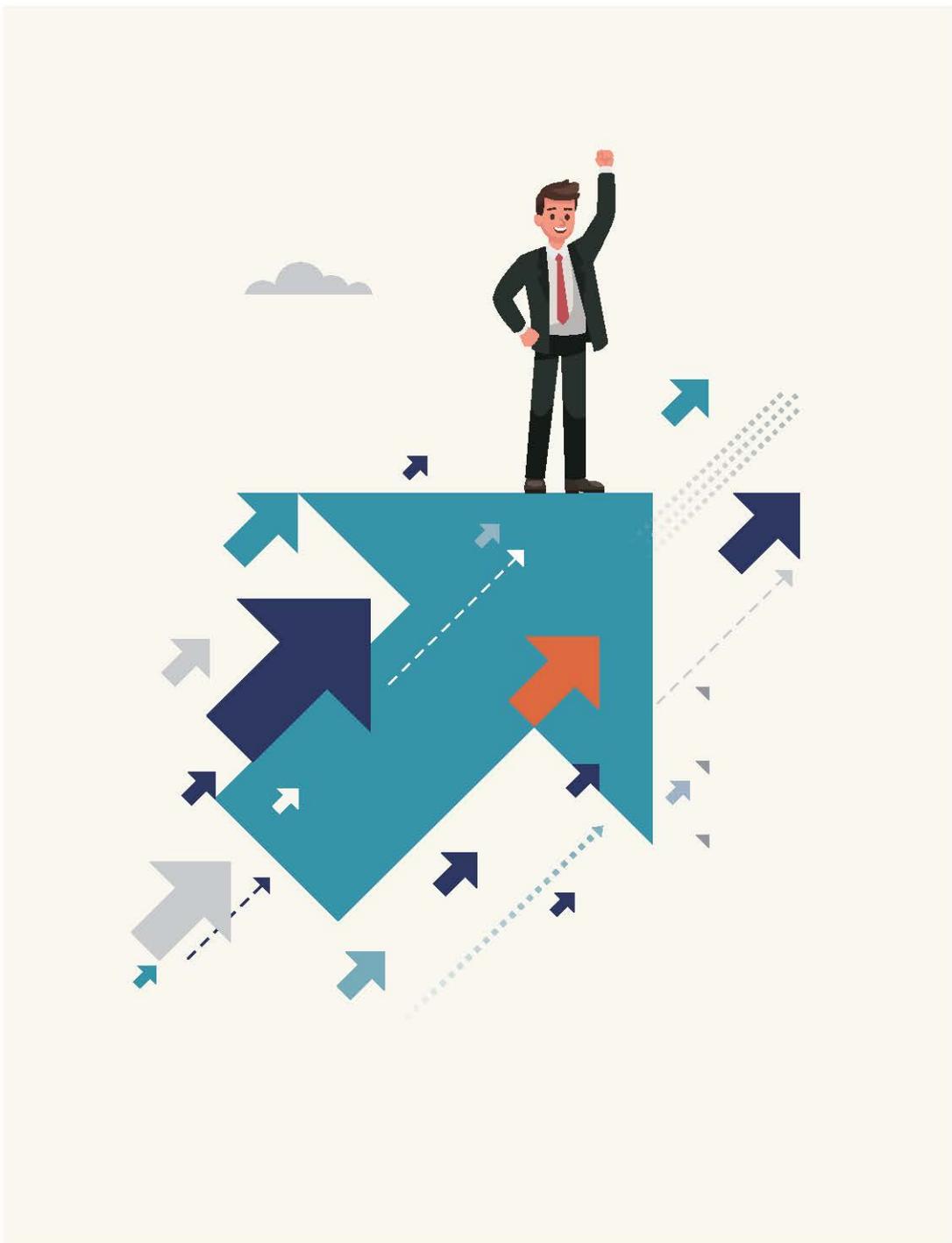
価格推移の緩戻し(反動)のこと。上昇局面における上値幅に対するその後の下落率、下降局面における下落幅に対するその後の上昇率の目安で、1/3、1/2、2/3のダウ・リトレースメント、それに1/8刻みを加えたギャン・リトレースメント、23.6%、38.2%、50%、61.8%、76.4%のフィボナッチ・リトレースメントなどが有名。日本でも半値押し、半値戻しなどというが、必ずしも統計的にその比率の反動が多いというわけではない。

ロスカット

損失を限定すること。上昇を期待して買いポジションを持った際、現在価格よりも一定割合下の価格に売り注文を出しておけば、思惑に反して下落した場合に自動的に売り注文が執行されてポジションを手仕舞うことができる。このような注文をロスカット注文という。また、評価損が一定割合を超えた場合にポジションを閉じるように事前に決めた判断基準のことをロスカット・ルールといい、損失拡大を防ぐ基本である。

ローソク足(ろーそくあし)

明治時代に日本で考案されたチャートのこと。名は形に由来する。高値と安値を縦線で結び、始値と終値を長方形で表し(実体[じったい]という)、終値の方が始値よりも高ければ白抜きで、安ければ黒で塗り潰す。実体から高値または安値までの縦線を影(かげ)という。単線でも需給の圧力が暗示されるほか、2本、3本の組み合わせの解釈も研究されている。現在では海外でもCandle Stick Chartと呼ばれ、利用が広がっている。



テクニカル分析を勉強したい方へ

当協会の資格制度は、国際テクニカルアナリスト連盟(IFTA、International Federation of Technical Analysis)の資格制度に基づいています。

NTAA認定テクニカルアナリスト

CMTA®(Certified Member of the Nippon Technical Analysts Association)。

誰でも挑戦できる初級レベルで、テクニカル分析に関する基本的な知識及び使用方法を学びます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。NTAAの資格です。

IFTA認定テクニカルアナリスト

CFTe®(Certified Financial Technician)。

CMTA®取得者を対象とした中級レベルで、テクニカル分析を用いた適切な現状分析と投資判断の仕方を学び、マーケット・レポートが作成できることが求められます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。日本語で受験できる国際資格です。

IFTA検定テクニカルアナリスト

MFTA®(Master of Financial Technical Analysis)。

CFTe®取得者を対象とした最上級レベルで、テクニカル分析に関する新たな手法、視点について論じた英語の論文を提出し、審査されます。国際資格です。



皆さん、通信教育講座を受けて、
資格試験にチャレンジしましょう。

発行済みのハンドブック

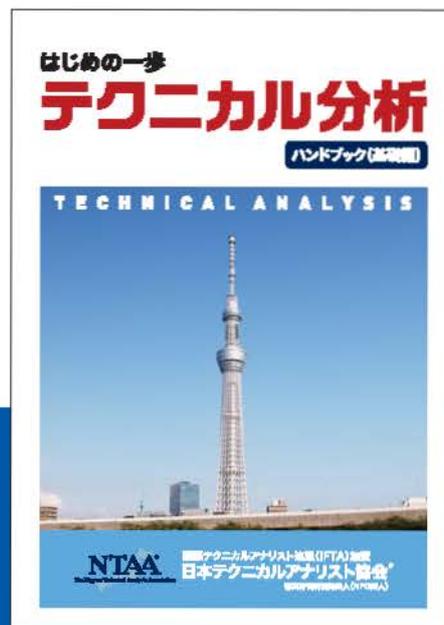
はじめの一步

テクニカル分析 ハンドブック(基礎編)

本小冊子は、資産運用に際しての「テクニカル分析」の導入部分を分かりやすく説明することを目的にしています。

したがって、すでに投資経験の豊富な方やテクニカル分析について知識のある方には“物足りない”小冊子です。

さらに奥深く学ぼうとする方は、当協会通信教育講座のほか、様々な参考文献が出版されておりますので、積極的に学んでいただきたいと思っております。



発行済みハンドブック2

はじめの一歩

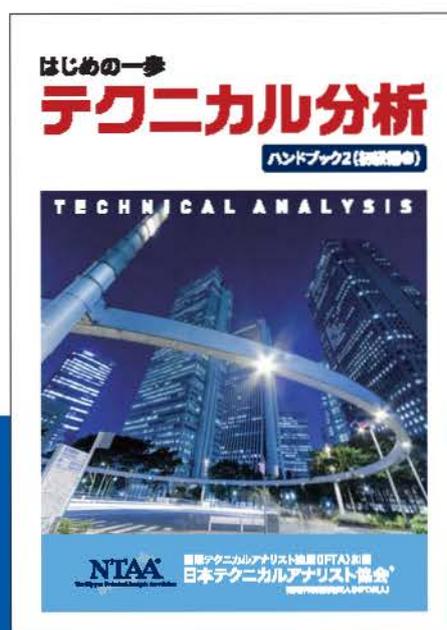
テクニカル分析 ハンドブック2(初級編①)

本小冊子は、前号「はじめの一歩 テクニカル分析 ハンドブック(基礎編)」に続いて一歩進め、テクニカル分析とは何かについて、さわりの部分のお話をします。

テクニカル分析には様々な手法がありますが、ここではローソク足、トレンドライン、移動平均線の3つについてご紹介します。

ローソク足は、日本で考案された価格記録法で、始値・高値・安値・終値の4本値だけを記録しているにもかかわらず、その時々々の相場状況を示唆してくれます。現在では世界中で利用されています。

トレンドラインと移動平均線は、価格推移の大きな傾向、すなわちトレンドを知るための手法です。このような分析手法をトレンド分析といいます。トレンド分析は、かなり古くから使われていたようですが、広く普及したのは、ここ半世紀のことです。



発行済みハンドブック3

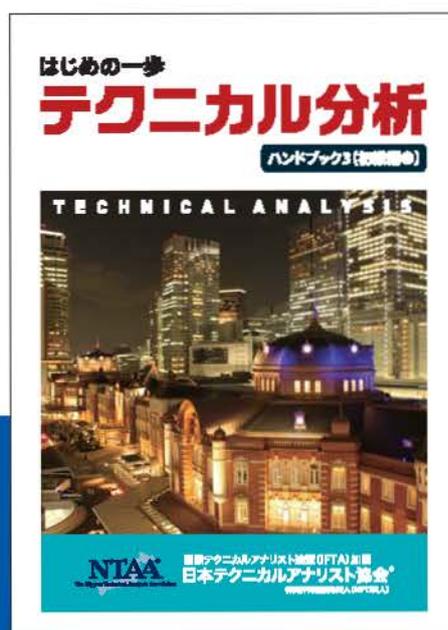
はじめの一步

テクニカル分析 ハンドブック3(初級編②)

テクニカル分析には様々な手法がありますが、ここではオシレーター分析、サイクル分析、出来高分析、フォーメーション分析、その他の手法についてご紹介します。

投資手法には順張りとは逆張りがあります。順張りは価格推移のトレンドに沿ってポジションを持つ方法、逆張りはトレンドが反転することを前提として、トレンドと反対方向にポジションを持つ方法です。テクニカル分析には、順張り、逆張りそれぞれに適した手法があり、用途に合わせて使い分けます。

また、コンピューターの普及により、テクニカル分析がどのように変化したか、ロケット・サイエンティストとはどのような人たちかという話もご紹介します。



MEMO

MEMO

はじめの一步 テクニカル分析ハンドブック4(用語集)

2018年10月1日 初版第1刷発行

非売品

発行所 特定非営利活動法人 日本テクニカルアナリスト協会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町3-3

TEL 03-5847-2231 FAX 03-5847-2232

URL <http://www.ntaa.or.jp/>

E-mail office@ntaa.or.jp

編集人 古城鶴也

発行人 戸部俊紀

デザイン 杉野寿一

印刷所 株式会社 港北スピード印刷製本

本誌掲載記事の無断転載・複製を禁じます。

